

研究論文

## 代替的パースペクティブとしての社会システム理論

藤 井 一 弘

### Social System Theory as an Alternative Perspective

Kazuhiro Fujii

【要 約】社会システム論は、現在、いわゆるグローバル化する全体社会をどのように理解するか、という課題に直面している。このとき、システムの在り方をどのように考えるかが問題となる。システムという言葉は、語源的に「調和」や「秩序」を内包し、社会システム論、とりわけ機能主義的な社会システム論はこれを引き継いだうえで、前述の課題に取り組んでいる。しかし、一般システム論の基礎を築いたベルタランフィは、それにとどまらないシステム理解を示していた。彼の「調和」や「秩序」を第一義的なものとし、ないシステムのカテゴリー化は、従来の機能主義的な社会システム論において部分システムと見られてきたシステムを、それぞれの自律性を徹底していくオートポイエシス・システムとしてとらえて、そこから理論を構成していく代替的な社会システム理論への展望を開くものである。ルーマンやシステム理論に依拠して自己の理論を展開している法哲学者であるクリストドゥリディスの所論が参照されるとともに、この代替的な社会システム理論の構想とその方法論的基盤が論じられる。

キーワード：システム、社会システム、観察、区別、オートポイエシス・システム

## 1 はじめに

社会・経済システム学会第18回大会（1999年11月）のシンポジウム「社会経済システム分析のフロンティア」において、問題提起者の徳安彰氏は「社会システム論の現在的課題」と題した報告の中で、これまでの社会システム論は、それが取り扱うシステムの最大単位を国民社会、すなわち国家の境界＝社会の境界と見なしてきたが、グローバリゼーションの進展とともに境界横断的に活動する機能分化したシステムが現れてきている状況に鑑みて、システムの単位を考え直す必要に迫られている、という主旨の指摘を行っている<sup>1)</sup>。

従来の社会システム論は、おおむね、社会システムの最大単位としての国民社会システムと、その維持・存続に資するその境界内で複雑に機能分化した下位システムという枠組みで展開されてきた。ところが、現在の機能分化したシステムは、経済システムに典型的に見られるように、国家の境界をいとも簡単に越えて、国民経済に破壊的なダメージを与えるような活動をしもしている。すなわち、従来の全体システム（国民社会）のもとで機能分化したシステムが全体システムの境界を越えて活動し、従来の全体システムにとって、ある場合には逆機能的な働きも示しており、また、従来の全体システムの境界を越えるとともに、従来の機能分類ではとらえられない形の機能分化したシステム（ある種の NGO や NPO）が出現している、というのが徳安氏の問題提起の背景であり、このような現状を包括的に理解しうるような社会システム論をどのように構想するか、というのが氏の問題関心であると思われる<sup>2)</sup>。

上述のような課題が現在の社会システム研究に突き付けられていることは十分に首肯できる。しかし、本稿では、そのような課題の立て方がシステム論の在り方の「一面」に根ざすものであり、社会システム論ひいてはシステム論一般にとっても別の在り方がありうるのでは、という立論をしてみたい。その別の在り方というのが、論題の「代替的パースペクティブ」の意味でもある。

まず、上記の「一面」が、システムという言葉のどのようなところからきているかを一瞥し、それが現在の社会システム研究にどのように引き継がれているかを論述する。次いで、その有様を批判的に検討しつつ、それに替わる社会システム理論の構想を概説したのち、その構想の妥当性にふれて結びたい。

## 2 システムの意味

O.E.D. によると、system は、ギリシア語 *σύστημα* (*sústēma*) に由来するが、*sústēma* は、「共に」を意味する *σύν* (SYN-) と、*στα-*を語根とする「配置すること、組み立てること」を意味する *ἵσταναι* (*hístānai*) が結合したものである。*sústēma* は、組織された全体、行政体、制度、

---

1) 社会・経済システム学会編『社会・経済システム』第20号、2001年11月、75-78ページ。

2) 同上。

人間あるいは動物の体、音楽の音程（音組織）、いくつかの韻律のひとまとまりになったもの、という意味をもっていたことがわかる。この内、前四者は、われわれが現在、システムの意味として馴染んでいるものでもある。一方、そのラテン語 *systema* は、後期ラテン語（175-600年）の時代には「音楽の音程（音組織）」という意味をもっていたことだけが記載されている。われわれに馴染み深い方の意味はラテン語ではずっと後になって出てきているのである。これをどう考えるかであるが、両者に共通の「音組織<sup>3)</sup>」という意味を現在のシステム理解につなげて考えてみたい。ヴァレリーの「詩人の手帖」の中に次のような記述がある。

各種の古代の観察と大昔の実験とは、噪音の宇宙から、楽音の体系もしくは宇宙を導き出すことを可能とした。楽音とは特に単純にして認知し得る、そして特に種々の結合、連合を形成するに適した噪音であり、——耳というよりはむしろ悟性は、それらが生ずるや否や、ただちにその構造、連絡、差異もしくは類似を知覚するときのものである<sup>4)</sup>。

ここから「音組織」は、体系（システム）であり、種々の結合や連合を形成し、その中に構造、連絡、差異もしくは類似が容易に知覚されるものと考えられるのである。このように見てみると、「音組織」という意味は現在の一般的なシステム理解、とりわけ後に述べるように社会システムの機能主義的な理解と直接的にと言ってもいいほど、つながっているのである。

機能主義、特にパーソンズの見解に対する大きな批判点は、それが維持とか平衡、調整、ホメオスタシス、組織構造の安定性、等々を強調しすぎ、その結果、歴史の流れ、社会文化の変化、内面から方向が決まるような発展、等々が脇役となり、せいぜいで否定的な価値づけの含みをもった「異常なもの」とみなされてしまう点である<sup>5)</sup>。

これは、ベルタランフィが1961年から1964年にかけて、ウェスタン・オンタリオ大学（ロンドン）、カリフォルニア医科大学（サンフランシスコ）、アルバータ大学（エドモントン、カナダ）で行った講義材料に基づいた彼自身の論考からの引用であるが、彼は、この引用部分のすぐ後に、バックレイの *Sociology and Modern Systems Theory*（邦訳書名『一般社会システム

---

3) system について英和辞典では、『新英和大辞典 第6版』研究社、2002年の訳語の12番目に「a 音〔和声〕組織 b 譜表」、『ジーニアス英和大辞典』大修館書店、2001年では、10番目に「音〔和声〕組織」の記載がある。ちなみに、『プログレッシブ英和中辞典 第3版』小学館、1998年では、この訳語は見られない。

4) Valéry, P.: 佐藤正彰訳「詩人の手帖」『ヴァレリー全集 第6巻』、1978年、筑摩書房、40ページ。

5) von Bertalanffy, L.: *General System Theory: Foundations, Development, Applications*, George Braziller, 1968. 長野敬・太田邦昌共訳「人間の科学とシステム概念」『一般システム理論—その基礎・発展・応用—』第8章、みすず書房、1973年、191ページ。

論<sup>6)</sup>』をレファランスとして取り上げている。このことに関わると思われるバックレイの見解は次のようなものである。

パーソンズは常に「秩序」の概念に深い関心を抱いていた。そして彼とE.シルズは「システム」という発想をこの概念によって定義しているのである。……すでにみたように、パーソンズとシルズは「この秩序は自己維持の傾向をもっているにちががなく、それは均衡の概念のうちにきわめて一般的に表現されている」と想定するに至る。ここでは、秩序の第二の意味（稀少性の諸条件のもとにおける平和的共存—引用者による）が明白に示唆されている。もう一つの中心的属性は、社会システムが環境（システムの部分ではないすべてのもの）に対してもつある境界線の内側で均衡を維持する傾向である<sup>7)</sup>。

バックレイは、パーソンズの枠組みの中に中立的な因果的關係と規範的ないし評価的關係が混在していることを指摘し、それは密度の高い命題システムではないと評価する<sup>8)</sup>。バックレイがここで参照しているのは、1951年の *Toward a General Theory of Action* (邦訳書名『行為の総合理論をめざして』) であるが、その評価がどれほどの妥当性をもっているかをここで詳しく検討することは差し控えたい。確かに、1971年の *The System of Modern Societies* (邦訳書名『近代社会の体系<sup>9)</sup>』) などに見られるパーソンズ自身の研究の進展も考慮の対象とするならば、パーソンズの枠組みが全く静態的なものであるというわけではないだろうし、1951年の *The Social System* (邦訳書名『社会体系論<sup>10)</sup>』) においても第11章で「社会体系の変動過程」が論じられてもいる。

しかし、その第11章で、パーソンズが「社会体系の理論の諸問題は、境界維持体系の経験的に観察されたパターンの恒常性として定義される均衡の維持と、その変化に関する諸条件の解明を中心として<sup>11)</sup>」いるとし、自らが研究を進めている構造的-機能的水準における理論が妥当するためには「境界維持的なタイプの体系に適用されなければならない<sup>12)</sup>」と述べているのを見ると、バックレイの批判が性急にすぎるといえるのは当たらないようにも思える。

また、その第4節「社会変動過程に関する二、三の特有のモデル」においても、そこでの論

---

6) Buckley, W.: *Sociology and Modern Systems Theory*, Prentice-Hall, 1967. 新睦人・中野秀一郎訳『一般社会システム論』誠信書房、1980年。

7) 『同上訳書』30ページ。

8) 『同上訳書』29-30ページ。

9) Parsons, T.: *The System of Modern Societies*, Prentice-Hall, 1971. 井門富二夫訳『近代社会の体系』至誠堂、1977年。

10) Parsons, T.: *The Social System*, The Free Press, 1951. 佐藤勉訳『社会体系論』(現代社会学大系 第14巻) 青木書店、1974年。

11) 『同上訳書』478ページ。

12) 『同上訳書』478ページ。

述の意図を「本書の概念図式が主として社会体系の均衡化過程との関連において展開されてきたが、それが変動過程にも適用できることを例証することである。ある体系は、制度化された変動過程に従っているのだから、それは体系であることをやめない<sup>13)</sup>」とも述べ、彼がここで考察しているなかでもっとも大きな社会変動と考えられるロシア革命以後のソビエト連邦の状況についても「その体制そのものがこなごなに崩壊するのでなければ、非常に複雑な調整過程がそのイデオロギーと社会体系の現実との関係において、次の世代または次の二世代のうちにならずおこなわれなければならない<sup>14)</sup>」と表明していることにおいても、ある秩序をもったシステムが、あくまで一時的な攪乱を経て再び均衡を取り戻すまでが変動過程である、とパーソンズが考えていることがうかがわれるのである。また、『近代社会の体系』における議論も、自らの図式の中に歴史的な事象を事後的に跡づけているのではないか、という印象が否めないということも、より詳細な検討が必要ではあるが付言しておきたい。

さて、いくつかの論述を引きながら、パーソンズに代表させて社会システムの機能主義的理解の基盤にある考え方を批判的に見てきたが、ここで注目すべきは、『一般システム理論』において「開放システムと定常状態」を鍵概念として議論を展開していると考えられるベルタランフィですら、パーソンズ流のシステム理解を非常に批判的に見ていたという事実である。これは、前述したシステムの語源に見られる「調和」や「秩序」といったものを、理論家がシステムというものを世界から切り出すときに、どれほど強力に前提としているかに由来すると考えられる。ベルタランフィは、定常状態を強調するが、彼はシステムを「相互関係を有する部分の総体<sup>15)</sup>」と規定している。そこでは「調和」や「秩序」といったものは後景に退いており、社会システム論における機能主義的理解とは一線が画されている。これに比べると、機能主義的理解には「調和」や「秩序」が強迫観念のようにこだましているように思われるのである。このように考えると、「はじめに」でふれた、グローバリゼーションの進む社会を現在の社会システム論が把握しきれていないという問題関心も、パーソンズ流の調和や秩序を前提としては理解しきれなくなった現代社会を、新たな「秩序」や「調和」をもっている全体社会として記述しようとする社会システムに関する包括的な枠組みを求める動きなのではないか、という疑問が浮かび上がってくる。

では、社会システムの機能主義的理解に対してどのようなオルタナティブが考えられるだろうか。次節では、まず「調和」や「秩序」を前提とするシステム論が、どのような現象を見落とすことになるかについての考察を糸口として、それに替わるシステム理論の可能性を探ることにする。

13) 『同上訳書』511ページ。

14) 『同上訳書』523ページ。

15) von Bertalanffy, L.: 「いくつかのシステム概念の初等数学的考察」『前掲訳書』第3章、51ページ。

### 3 観察（区別）としてのシステム

前述したように、語源的には、システムという言葉は調和や秩序を内包していた。このような言葉は、社会システム論に一体どのような影響を与えてきただろうか。

ベルタランフィも言うように、言語あるいは文化のカテゴリーは「統覚を変化させる、すなわち経験された実在の特性の中のどれに焦点を合わせどれを強調するか、どれは無視するかを左右する<sup>16)</sup>」。このことを、やはりベルタランフィが美術に関して言及した以下の一文をもとに敷衍してみよう。

彼ら（後になって現代ヨーロッパ芸術にいちじるしい影響を与えたほどすぐれた日本の美術家たち—引用者による）がそうしなかったのは、中心遠近法は見る者の立場によって左右され、偶然的であって、見る者が場所を移すとそれにつれて変わるので実在を表わさないと感じたからではないかと推測してみてもよいであろう。同じようにして、日本の美術家たちはけっして影というものをつけなかった。もちろんこれは彼らが影を見なかったとか……を意味するものではない。……影はものの実在に属するものでなく、単に変化する外観にすぎないからである<sup>17)</sup>。

中心遠近法というカテゴリーによって、ヨーロッパの美術家は、自らが経験した実在のうちのある特性に焦点を当てることになった。しかし、そのカテゴリーに習慣的に依拠するうちに、彼／彼女らはそれに依拠していることを意識することをしなくなっていった。これは、Aが見る世界は「Aの眼」で見たものであるが、その世界を見た「Aの眼」はAには見えない、ということである。しかし、彼／彼女らはそれについて驚きとともに気づくことになる。それは、日本の美術家たちがそのカテゴリーによって描いた絵画との大きな相違によってであった。このとき、ヨーロッパの芸術家たちは自らが依拠するカテゴリーを論じるための別のカテゴリーを手にしたと言えるだろう。

この脈絡で言うと、調和や秩序を内包するシステムというカテゴリーも、当然、何ものかを強調しつつ無視しているということになる。言うまでもなく、このようなシステムが無視したものは、システムには見えない。ここで再度強調するが、この場合のシステムは決して実体ではありえない。それは、そのようなカテゴリーに基づいた観察（区別）によって初めて切り出されるものである。機能主義的な社会システムは、「調和的に（秩序をもって）相互に関係する／しない」という観察（区別）を行う。そして、その観察（区別）にしたがって自己再生産していく。「しない」側は、社会システムによって縮減（削除）されていく。このプロセスを記述したものが、前述したパーソンズ流の社会システムに関する機能主義的理解に他ならない

---

16) von Bertalanffy, L.: 「カテゴリーの相対性」『同上訳書』第10章、229ページ。

17) 『同上訳書』227ページ。

(そして、それは現在の社会システム論一般の問題関心にも通じている)。

ここで注意されねばならないことがある。上述のように言うと、「調和的に(秩序をもって)相互に関係する／しない」という区別の左項として社会システムが世界の中に初めから存在していて、それが発見されるだけである、という印象が得られるかもしれない。これは誤解である。そこで若干くどいが、今一度、別様に記述しておきたい。すなわち、まず在るのは「調和的に(秩序をもって)相互に関係する／しない」の「／」だけである。この「／」の左項として、「調和的に(秩序をもって)相互に関係する」ものが切り出され、その後に「調和的に(秩序をもって)相互に関係する／しない」が完成することになる。

しかし、この観察(区別)を行うにあたっての線引き、すなわち「調和的に(秩序をもって)相互に関係する／しない」の「／」の部分は、絶対的な線引きではありえない——中心遠近法だけが世界を切り出す唯一のカテゴリーではなかったように。機能主義的な社会システムにとっては、それはAが世界を見るための「Aの眼」であり、その眼がAには見えないように、機能主義的な社会システムには見えないが、それだけのことでもある。AがAの眼によって世界を見ていることを、しかしBは見るができる——ヨーロッパの美術家が日本の美術と出会うことによって、自らの見た世界はある特定のカテゴリーにそって切り出されていたものであることに気づき、自らが依拠してきたカテゴリーを問題にする機会を得たように。

ここで、そのBとして、前述のベルタランフィによる「相互関係を有する部分の総体」という規定を導入してみよう。この場合、「相互に関係する／しない」という観察(区別)によって、相互に関係する側としてシステムができあがる。そして、システムはその観察(区別)によって自己再生産していくことになる。これは、システムの規定として充分肯定できるものであろう。機能主義的な社会システムが切り捨てた部分は、「相互に関係する／しない」という観察(区別)にしたがって線引きを行う別のシステム論によって問題に付され、掬い上げられることになる。そこで掬い上げられる部分は「調和(秩序)をもって関係する」以外の部分である。すなわち「調和的でない(明確な秩序をもたない)が関係する」ものも、ここでは観察(区別)の対象となっていく。

では、「調和的でない(明確な秩序をもたない)が関係する」部分を観察(区別)の対象とすることは許されないだろうか。機能主義的な社会システム論以前のシステム論(ここではベルタランフィ流の一般システム論を想定している)が考えていた、もともとのシステムは「関係性がある／ない」で観察(区別)を行っていたとすれば、これは縮減(削除)されるべきものではないだろう。機能主義的な社会システムの観察(区別)は、このようにして批判の対象となるのである。この「調和的でないが関係する」部分を観察(区別)することができる社会システム理論については、節を改めて論じることにする。

#### 4 オルタナティブな社会システム理論

「調和的でないが関係する」社会システムとはどのようなものか。そして、それを観察(区別)する社会システム理論はどのように構想されるか。このことに関して、市民社会における

政治は、法によって包摂されうるという主張（共和主義法理論とも呼ばれる）をシステム理論に依拠しつつ批判するクリストドゥリデイスの所論<sup>18)</sup>を参照しながら考察を進めることとする。

彼の所論は、政治的主権が法においてどのように表現されるかを論じる共和主義理論が、社会的なるもの、あるいは政治的なるものの領域を法の支配下においていく過程を推進するものと考え<sup>19)</sup>、この法による政治の囲い込みから政治の可能性を救い出そうとするものである。これを前節で述べたシステム論の言葉にそって敷衍すると、法システムと政治システムは世界を別様に観察（区別）するものとして、それぞれ独立のシステムであると考えられるにもかかわらず、共和主義法理論は、政治システムの観察（区別）をも法システムの観察（区別）のもとに包摂し、法システムへの一元化を図ろうとしている、ということになる。このとき、法システムが行う観察（区別）によって切り出されない部分は、すべて削除されていく。これについて、例えば、クリストドゥリデイスは「紛争（この言葉は政治とほぼ互換的に使われていると思われる）」が、法システムによって選択的に考慮され、紛争の可能的な在り方が縮減され、その一部が不活性にされていくさまを詳しく論じている<sup>20)</sup>。

現在、日本では、在日外国人の選挙権・被選挙権の問題をめぐる様々な動きがあるが、上述の枠組みでは、これを以下のように記述できるだろう。すなわち、極端なケースでは、この問題に対して「合法である／ない」という観察（区別）を行う法システムは、単に在日外国人のそれらの権利は現時点の実定法の中で認められていないがゆえに認められない、という決定をして、そこですべてが打ち切られるのである。すなわち、「市民」とは誰のことか、という問いは法システムの中では問題にされない。共和主義法理論は、市民社会においては政治は法に包摂される、と主張しているが、そこでの市民は実定法に規定されている市民だけを含んでいるのである。

では、誰が「市民」であるのかを問題にできる——市民権をめぐる紛争を自らのシステムの観察（区別）の中に含む——ような法システムはありうるのか。これもありえない。というのは、もしもそのような観察（区別）を法システムが導入したとしたら、それはそのシステムを変質させてしまうからである。それは、もはや法システムと言えるものではないであろう。法システムは、あくまで「合法である／ない」という観察（区別）をするものである。そこで強引に市民権をめぐる紛争を法システムの中に取り込むようなことをすれば、「法それ自体の位置が見失われてしまう<sup>21)</sup>」のである。

ここまでで明らかになったことは、法システムが自己の観察（区別）を貫徹して、その限りにおいてすべてを内部化していくという意味で、自律的なシステム——オートポイエシス・シ

18) Christdoulidis, E. A.: *Law and Reflexive Politics*, Kluwer Academic Publishers, 1998. 角田猛之・石前禎幸 編訳『共和主義法理論の陥穽—システム理論左派からの応答—』晃洋書房、2002年。

19) 『同上訳書』35ページ。

20) 『同上訳書』特に、第8章「融合される紛争」を参照のこと。

21) 『同上訳書』123ページ。



システム<sup>22)</sup>——であること自体が、逆説的ではあるが他の観察（区別）をするシステム——この場合は政治システム——を必要とする、ということである。さらに、法システムと政治システムそれぞれの観察（区別）を統合するような上位システムを考えることもできない。もし、そのような上位システムを導入したとすれば——これは機能主義的な社会システム論の立場でもあるが——、それぞれのシステムの自律性は損なわれ、ことさら法システムの観察（区別）あるいは政治システムのそれを語る必要はなくなることになる。

しかし、法システムと政治システムは没交渉というわけではない。それらは、相互浸透するものであり<sup>23)</sup>、法システムが問題にできない、「合法である／ない」という観察（区別）の「／」は政治システムによって観察（区別）の対象となり議論の俎上にのせられる。当然、そ

- 
- 22) Maturana, H. R., and Varela, F. J.: *Autopoiesis and Cognition: The Realization of the Living*, D. Reidel Publishing Company, 1980. 河本英夫訳『オートポイエーシス—生命システムとはなにか』国文社、1991年、27-30ページ、70-73ページによると、オートポイエシス・システムは、観察者による識別（観察・区別）によって背景から特定された単位体の構成素間の諸関係である有機構成が、構成素が構成素を産出するという産出プロセスのネットワークになっているシステムである。この有機構成が再生産・維持されていることにおいて、その有機構成に関わるものは、すべてシステムの内部として記述される。ここから、オートポイエシス・システムの4つの特徴、(1)自律性、(2)個性性、(3)境界の自己決定性、(4)入出力の不在性が導かれる（『同上訳書』73-75ページ）。ここでは、法システムが、法的行為としての「合法である／ない」という自己の観察（区別）を絶え間なく再生産しつつ、世界を自己の観察（区別）の中に取り込み内部化していくシステムであることに注目し、それをオートポイエシス・システムであると考えている。法をオートポイエシス・システム（そのシステムのとらえ方には異見もあるが）として論じた代表的文献として、Teubner, G.: *Recht als autopoietisches System*, Suhrkamp Verlag, 1989. 土方透・野崎和義訳『オートポイエーシス・システムとしての法』未来社、1994年をあげておく。
- 23) Luhmann, N.: *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp Verlag, 1984. 佐藤勉監訳『社会システム理論（上・下）』恒星社厚生閣、1993／5年、335-336ページによると、相互浸透は、あるシステムと他のシステムが交互に他方のシステムの環境の一部となっているようなシステム間の関係であり、双方のシステムがそれぞれのシステムによって構成された複合性——ここでは、法システムが自らの観察（区別）によって切り出した世界と政治システムが行ったそれ——を他方のシステムに提供し、その複合性を豊かにすることが交互に行われることで、それぞれのシステムが交互に他方のシステムの成り立つ前提条件となっている場合に見られるものである。

の逆もある<sup>24)</sup>。前述した「調和的ではないが関係する」システムとして「関係する／しない」によって観察（区別）を行う社会システム理論の観察（区別）の対象となるのである。

これまで述べてきたことを、以下のようにまとめることができるだろう。

社会に在る部分システム——全体社会を維持・存続させるために機能を分かち合っているという意味での部分システムではない。ただし、ここではそれに替わる適当な名称がないので、暫定的にこのように呼ぶ——は、それ自体の観察（区別）にそって自己再生産を継続し、その限りにおいてすべてを内部化していく（ファースト・オーダーの観察）。しかし、部分システムはそれ自体の観察（区別）を観察することはできない。この観察は、他の部分システムによって観察される（セカンド・オーダーの観察<sup>25)</sup>。ここには終点はない。この終点のない観察

24) オートポイエシス・システムとしての政治システムは、世界に対して権力／非権力（あるいは、権力をもつ／もたない、統治者／被治者）という観察（区別）を継続していくものであるが、この観察（区別）は現在「政府／野党」という図式にとっかわられてしまっている、とルーマンの議論に基づいてクリストドゥリディスは論じている（Christdoulidis, E. A.:『前掲訳書』235-236ページ）。政府／野党という観察（区別）は、選挙の際にテーマとなりうるものだけを政治システムが自らの世界の中に取り込むことを意味する。言い替えると、票になるものだけしか政治システムの観察（区別）の中に含まれないということになる。このような事態に対して、「何が政治的であるかを争い、何が政治的に可能であるかを争い、これら問いが争われている用語自体を争うことの現実的な可能性を許容する」（『同上訳書』238ページ）ような政治システムをクリストドゥリディスは構想する。本文で示した在日外国人の選挙権・被選挙権をめぐる問題は、政府／野党図式の中では、直接的に票に結びつかないがゆえに政治システムの問題とはならない——なぜなら、現時点では在日外国人は投票権（票）をもっていないから。もっとも、当該問題に対して各政党が取る態度によって、日本において選挙権を有する者の投票行動が影響を与えられるという間接的效果は否定できないが——。クリストドゥリディスの構想する政治システムは、このような問題をも含むアジェンダをめぐる、世界を観察（区別）していくシステムである。この箇所では、このようなものとして政治システムをとらえている。

25) ファースト・オーダーの観察／セカンド・オーダーの観察は、第1次的観察／第2次的観察と同義である。また、自己準拠／他者準拠と言い替えることもできる。自己準拠については、Luhmann, N.:『前掲訳書』50ページで「自己準拠の概念は、なんらかの要素、なんらかの過程、またはなんらかのシステムが、それぞれそれ自体として存在している統一体であるということを言い表している。『それ自体として』ということは、それ以外のものによる観察の仕方に依拠しないということの意味しているのである」と規定されている。また、自己準拠と他者準拠については、Luhmann, N.: *Die Wirtschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag, 1988. 春日淳一訳『社会の経済』文真堂、1991年、3ページに「自己準拠的循環のこの閉鎖性は、決してひとつの事態としてそれだけで可能になるのではない。そうではなくて、〔他者準拠と〕共に進む自己準拠としてのみ組み込まれるのである。閉じたシステムは開いたシステムとしてのみ可能であり、自己準拠は他者準拠と組み合わせられた形でのみ現われる。以前は対立関係として定式化されていた概念の関係をこのように性質強化の関係に変換することは、最近のシステム論の最も重要な成果のひとつである」という記述がある。第1次的観察／第2次的観察としてルーマンの議論を敷衍したものとしては、Kneer, G., and Nassehi, A.: *Niklas Luhmanns Theorie Sozialer Systeme*, Wilhelm Fink Verlag, 1993. 館野受男・池田貞夫・野崎和義訳『ルーマン 社会システム理論』新泉社、1995年の第Ⅲ章6節をあげておく。藤井一弘「オートポイエシス—経営学の展開におけるその意義—」経営学史学会編『経営理論の変遷—経営学史研究の意義と課題—』文真堂、1999年においても、システムが行う観察（区別）を自己準拠と他者準拠の概念にそって検討した。

(区別)を行うものとして、機能主義的な社会システム論とは異なる代替的な社会システム理論が構想されるのである。ここでは、ある部分システムの観察と別の部分システムの観察を、観察(区別)しきるメタ・システム(全体社会)を論じることは断念せざるをえなくなる。さらに、部分システム間の観察(区別)が統合される場所である「調和(秩序)をもって関係する」全体社会についても同様である。

## 5 結び

メタ・システムについて論じない社会システム理論は、一見、奇妙なものであろう。この疑問について、自説を述べて本稿を結びたい。以下は、これもベルタランフィの『一般システム理論』の中の一節である。

科学思想における最近の変化で重要な側面の一つは、唯一無二の、一切を包含するような「世界システム」はないということだ。科学が作りだす構造はすべて、実在の特定の面あるいは景観を表わすモデルである。理論物理学でさえそうである<sup>26)</sup>。

ベルタランフィは、科学が推し進めてきた、人間生来の経験の限界を取り去るという意味での「世界像の脱擬人化」によって、最後に数学的諸関係の体系が残り、そこにおいて人間特有の感覚経験の束縛は取り払われ普遍性が獲得される、という見解を一旦は表明している<sup>27)</sup>。しかし、上記引用に加えて、「世界に関する私たちの精神的表現がなぜ常に実在の一定側面あるいは景観しか映さないかには、おそらく深いわけがあるかもしれない。私たちの思考は、少なくとも西欧言語において、またたぶんすべての人間言語において、本質的には反対概念でものを考えることである<sup>28)</sup>」と、再度反問するのである。彼の言う「反対概念でものを考える」とは、まさに本稿で繰り返し言及した「／」に関わるものであろう。

「代替的な社会システム理論」も自らがどのような観察(区別)を行っているか(ファースト・オーダーの観察)については観察(区別)できない。この観察を、別の理論(例えば、一般システム理論)が観察(セカンド・オーダーの観察)できたとしても彼の見解は生きている。すなわち、観察は終わらない。一般システム論といえどもメタ理論とはなりえないのは、上に見る通り、その理論の提唱者であるベルタランフィ自身が明言しているところである。いわんや、社会システム理論においてをや、というところであろう。そこで、できることは、ただ、観察を続けるのみである。

---

26) von Bertalanffy, L.: 「一般システム理論の進歩」『前掲訳書』第4章、92ページ。

27) von Bertalanffy, L.: 「カテゴリーの相対性」『同上訳書』第10章、235-237ページ。

28) 『同上訳書』240ページ。

【参考文献】

- 馬場靖雄『ルーマンの社会理論』勁草書房、2001年
- von Bertalanffy, L.: *General System Theory: Foundations, Development, Applications*, George Braziller, 1968. 長野敬・太田邦昌共訳『一般システム理論—その基礎・発展・応用—』みすず書房、1973年
- Buckley, W.: *Sociology and Modern Systems Theory*, Prentice-Hall, 1967. 新睦人・中野秀一郎訳『一般社会システム論』誠信書房、1980年
- Christdoulidis, E. A.: *Law and Reflexive Politics*, Kluwer Academic Publishers, 1998. 角田猛之・石前禎幸編訳『共和主義法理論の陥穽—システム理論左派からの応答—』晃洋書房、2002年
- 藤井一弘「オートポイエシス—経営学の展開におけるその意義—」経営学史学会編『経営理論の変遷—経営学史研究の意義と課題—』文眞堂、1999年
- 藤井一弘「オートポイエシス—その観点の経営への適用の可能性—」『甲子園大学紀要』No.27 (B)、2000年3月
- 伊藤由子・藤井一弘「多文化社会理解への新視点—オートポイエシス・アプローチ—」『甲子園大学紀要』No.24(B)、1997年3月
- Kneer, G., and Nassehi, A.: *Niklas Luhmanns Theorie Sozialer Systeme*, Wilhelm Fink Verlag, 1993. 館野受男・池田貞夫・野崎和義訳『ルーマン 社会システム理論』新泉社、1995年
- Luhmann, N.: *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp Verlag, 1984. 佐藤勉監訳『社会システム理論（上・下）』恒星社厚生閣、1993/5年
- Luhmann, N.: *Die Wirtschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag, 1988. 春日淳一訳『社会の経済』文眞堂、1991年
- Maturana, H. R., and Varela, F. J.: *Autopoiesis and Cognition: The Realization of the Living*, D. Reidel Publishing Company, 1980. 河本英夫訳『オートポイエーシス—生命システムとはなにか』国文社、1991年
- Parsons, T.: *The Social System*, The Free Press, 1951. 佐藤勉訳『社会体系論』（現代社会学大系第14巻）青木書店、1974年
- Parsons, T.: "Introduction to Part Four in *Theories of Society: Foundations of Modern Sociological Theory*", The Free Press, 1961. 丸山哲央訳『文化システム論』ミネルヴァ書房、1991年
- Parsons, T.: *The System of Modern Societies*, Prentice-Hall, 1971. 井門富二夫訳『近代社会の体系』至誠堂、1977年
- Parsons, T.: 倉田和四生編訳『社会システムの構造と変化』創文社、1984年
- 社会・経済システム学会編『社会・経済システム』第20号、2001年11月
- Teubner, G.: *Recht als autopoietisches System*, Suhrkamp Verlag, 1989. 土方透・野崎和義訳『オートポイエーシス・システムとしての法』未来社、1994年
- Valéry, P.: 落合太郎・鈴木信太郎・渡辺一夫・佐藤正彰監修『ヴァレリー全集』、筑摩書房、1978年